到延詞場孰競雄　到る所の詞場孰か雄を競わん。
子玉亡来眠始穏　子玉亡来して眠り始めて穏かなり
普天無限晉文公　普天限りなし晉文公

付記（編集子）

この後に終章「流風遺韻」がつづき、最後に「恩年譜」で終っているが割愛したことを諒とされたい。

梅木先生は且て佐伯中学に教鞭をとられ、後多年別府大学付属図書館にご勤務、現在同大学文学部講師。「佐伯文庫」についてのご研究が深く、一昨年お招きして文化会館でご講話をお伺いした。このご縁で本会客員（賛助会員）として、「佐伯史談」は毎号ご覧いただいている。

（その講演録音テープ二時間もの一本会所蔵、貸出すので、復習なさってはいかが。

郷土史誌

因尾物語〈その三〉

牛の頭大明神

―世利山を歩いての発見―

会員　羽柴　弘

はじめに

堂ノ間（本匠村）の三窪江大明神と、因尾（同村）の前高大明神の両社には、その祭神平の光世・光国兄弟の、落人としての伝承があることは、よく知られている。これから述べるこの「牛の頭大明神」は、その落人兄弟にからまる伝説で、伝える人々により、あれこれと違いがあって困るが、その原拠となる文献は、大友興廃記巻十三に出ている、「三窪江大明神之由来」として書かれている。そこで、ここではそれを本筋として検討して見たい。というのは、それが興廃記の筆者が、筆にまかせて虚構な物語を作ったというのでなくて、この表題のことばは、ちゃんと本匠村小川の奥、芹（せり）という奥深い谷間に、「大明神」と書かれた石の祠があるので、敢えてとり上げたわけである。

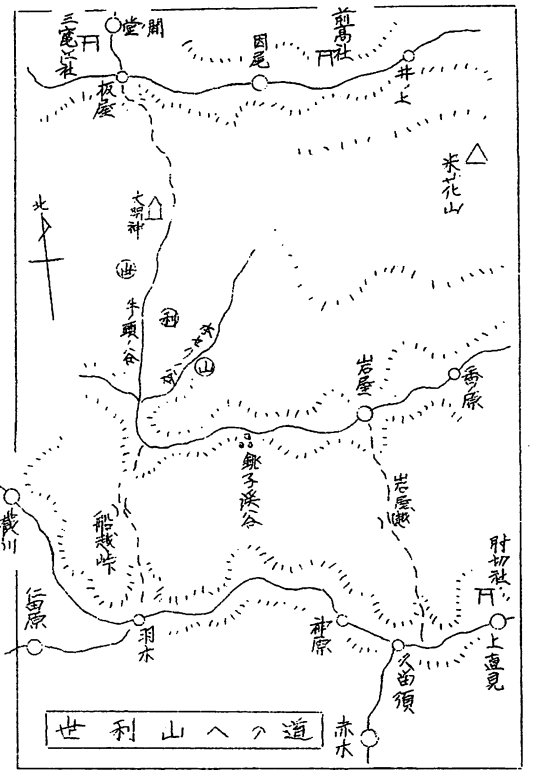
ところで、村の人々はそれを「牛ん頭ん山ん神さん」と呼んではいるが、この谷が、平ノ光世・光国兄弟の逃避行のコースであったことに、とんと頓着がないようである。それで一応筋道をたどりながら、若干私の推測・推論を加えながら、解説を加えて見たい。

尚、因尾物語の(三)とはしたが、内容から言えば「小川の芹の物語」であるが、因尾両神社の祭神が、因尾の里目指しての逃避行の途中の物語であるので、特にさし加えたく、この点お含みの上で読んでいただきたい。

(一)　その発端から世利山へへの道

そもそも落人両人が、直見の里まで逃れて来て、まっ白く咲いた一面の蕎麦畑を見て、「なお海か」と言われたので、そこを「猶海（直見）」と呼ぶことになった、と大友興廃記は書いている。直見の地名が、全くこれに由来するかどうか。少々怪しい。しかし話としては面白いといえる。

ところが、すぐ里人に見つかった。「すわ、落人よ」と攻め立てられ、光世は肘に矢傷をうけ、「痛むこと甚だし」（括弧書きは興廃記―以下同じ）となり、光世は牛の背に乗り「世利山という深山に紛れ入り、」難渋の末「因尾の里に出でたまう」と興廃記の記者は述べている。この辺文脈に乱れがあり、ずい分記述があちこちになって



大いに読者を困らせるが、現地にのぞめば、案外すっきりと理解できる。私はここで以前からずうっと考えつづけていた、落人両人のたどった道すじを、一応次のように決定していることをのべたい。（地図参照）

直見の里から山に分け入っても、光世の傷のいたみがあるし、ぐずぐずしておれない。幸い小さな山道（岩屋越し）に出くわし、小さな尾根を越せば、目の下に数戸の人家が見える。それは今の小川の一番奥の部落、岩屋に外ならぬ。光世は殆んど光国に負われるようにして、村里に下りついたであろう。

異様な二人の姿に驚いた里人も手傷を負うて苦しむ光世を見て、素早く傷の手当と、飲みものや食べ物をすすめたことだろう。根が正直な山里の人々、一刻も早く安全なかくれがを求める、兄弟の切なる願いに応じて、いくらか当座の食物を持たせ、怪我人の光世は牛の背に乗せ、山道をわけて世利山へと案内したことであろう。牛の代償としては若干の金子か、腰につけていた何かを与えたことも考えられる。

世利山は岩屋からざっと四キロ、今でこそ坦々とした林道が通じ、トラックや自家用車がアッと思うまに山奥まで達する。しかし当時は林産物何一つあった時代でない、たまに猟師がやぶを押しわけながら通る小径、牛の背にけが人をのせてのこととて、谷を渡り、密林をわけてのことである。まいかぶさる蔓草に行手を全くさえぎられたりしながらの難行苦行、ついに「乗りたる牛殺れて一足も動かず。光世嘆って牛の頭を切り――」ということになったが、さんざん苦労のあげく、ともかく「因尾の里に出でたまう」と、興廃記には書かれてある。

この牛の頭については、興廃記には、

「右の牛を書したる山の近所に、玄負という山居人あり、其の牛の頭を神にいわい（まつり）牛の頭大明神とあがめ置く。」

とあり（それは後になってのことであろう）、使っていた竹の鞭をさしておいたら「生長して竹少々今にあり」ということまで書いてあるので、これらの伝説はかなり具体性、現実性がある。

㊂ 牛の頭大明神

さて、この牛の頭大明神が、今も尚れっきとして世利山（芹）の奥に祀られているのだから、見つけ出した私は驚いた。改心の躍動をおさえながら森の中に分け入ったら、巨巌を背に、スケッチ（次頁）のような石の祠と塔とが並んで建っている。祠の高さは六〇センチばかり、両方共灰石で出来ている。祠の前には神酒徳利をそなえたのであろう、陶器みが三つ並んでいる。榊はたてはいるが、神（さかき）らしい枝がある。

大明神の祠

二つとも「大明神」の三字だけが読めるが、向って左のはその文字もかすか、造立の年月など全くないが古い方（向って左）は随分古いようで、数百年前のものであろう。

ここは「牛の頭の山の神さん」と呼ばれて、山仕事にかかる際、御神酒を供えて作業にけが・あやまちのないよう、つまり山の神としてのまつりをしていることを示している。それはそれでよい。この世利山（芳）にあけ入り、火薬や切れもの扱う猟師や山稼ぎの人々が、豊猟を祈り、無事息災を願うことは当然で、それは「山ノ神」「山神社」でなくて、「大明神」でも結構である。

しかし、「大明神」の文字は明らかで、「山の神」ではない。つまり平の光世・光国兄弟が世利山越しをした時の、「牛の頭」をまつった「大明神」であり、兄弟はここを通って因尾に越したことを、決定的に立証するものである。

では牛の頭を祀ったという、興廃記にある「玄貞」という、山居の人は誰だろう。伝説によるとこの牛ノ頭の谷の東に並ぶ今一つの谷、村の人達は「本芳」と呼んでいる谷に、ゲンチインと呼ぶ土豪の屋敷があったといい、今も杉林の中にどっしりとした五輪の塔がある。その双方のゲンが相通ずることに注目しよう。その玄貞が玄智院又は玄地院というように名乗った、つまり同一の人物ではあるまいかとの推測が出来る。

私は、光世兄弟の怨霊について次のように考えている。

①まず、両人の怨念を慰めるため、堂ノ開村の人々が兄光世を三窪江の神にまつり、因尾村は弟光国を前髙明神とした。

②このことを伝え聞き、直見の人々は野切社をまつり、慰霊のことをした。

③そこで玄貞ら（村の人々共）「牛の頭大明神」によって兄弟の霊をまつった。

こんな順ではなかったか。

③ 歴史の無情

兄弟が世利山へはどこを越してはいったか。前ページの地図にも示し、俗説「船を恋しがった」として、羽木から船越の峠を越して――というそれはとらない。それだと神ノ殿のような人里を通らねばならない。直見から深林にのがれたとすれば、岩屋越しがすぐであるし、傷の手当や牛を手に入れるためには、小川の村里を経由することが必要、とかく山家の人々は外来者に対しては温情を以て迎えるものである。

世利山（芳）を経て、さらに山深い因尾の里へというのは、恐らく小川の人々の親身になっての助言であったろうし、普通なら落人が隠れ棲むにもふさわしいところ。しかし相手があるかった。鎌倉殿（源頼朝）は、日向椎葉の奥まで探索・追討の、非情な方であった。

非情といえば、この平光世兄弟を討ったのは緒方惟栄の手のものといわれ、興廃記には「因尾に於て、光世・光国、緒方三郎惟栄が為に誅せらる」と記されている。緒方惟栄は佐伯に由縁ふかく、佐伯氏の先祖ともいえるので、ちょっといやな気がする。

歴史はこのように非情、いや無情なものである。

（おわり）